

震災後の子どもたち(5)

長男と野球と震災

宝満 博子

長男は、小学六年生。Jリーグのブームによってサッカー少年が急増している中、サッカーには見向きもしない根っからの野球少年である。小学一年生ではまだ早いということで二年生になるのを待って、四月早々、軟式少年野球、妙法寺チームに入部した。毎週土、日曜日の練習を繰り返し、先輩たちの試合の様子を目にし、耳にし、自分たちも早く六年生になって試合に出たい、と思いをふくらませて

いた。

平成七年正月、前年十二月に六年生は退団し、最上級生となった長男たちは、そのシーズンの必勝祈願の初詣の様子を取材されることになっていた。地元のK新聞の方が来られ、近くの神社で、新六年生十八名、優勝を目指し新たな気持ちで参拝した。いよいよ自分たちの番がやってきた、と期待と緊張が伝わってくるようだった。この時の様子は二月一日

の新聞に載るはずだった……。

そして、一月十七日、全く予想もしていなかった、想像を絶するあの地震が起こったのだった。神戸という所は台風の被害も少なく、ましてや地震というものとは無縁の場所だと思っていた。全く何の防護もしていなかった。あの激しい揺れでタンスの上の物が落ち、子どもたちの勉強机や本箱の本はすべて落ちていた。食器も数個、食器棚からとび出し割れていた。近所には、瓦が落ち、家の外壁に多少のひびが入っている家もあった。しかし、我が家の周りの被害はその程度だった。同じ須磨区でも、海沿いの被害はひどい。古い家屋は倒れ、その上、火が出て一面焼け野原になってしまった。幸運と不運を分けた活断層の仕業に、ただただ従うしかなかった。

地震直後は、余震の不安と断水のため、我が家も一時、西神の実家に避難した。学校は一月いっぱい

休校となった。

こんなことがあっても、実際、子どもたちは無邪気である。時々、グラツとくる余震にも、「キーン！」と、つい声を出してしまうのは私の方で、子どもに言わせると、「お母さんのその声の方が可愛い」らしい。電気、ガスは当初から使えたが、断水している間の水くみも、近所の子どもたちとバケツリレーで、寒い中、服をぬらしながらも楽しんでいった。休校中は、トランプをしたりファミコンをしたり、さすがに外へ出て遊ぶ子どもはいなかったが、家の中で、こんな時だから勉強しなさいとも言われない自由な時間を満喫していた。

二月に入り、小、中学校、幼稚園（一部地域を除く）が再開された。幸い、子どもたちが通っている若草小学校では、先生方も生徒も全員無事だった。

授業の方も少しずつ始まり、すっかり普段の生活をとりもどしていった。こうなってくるといつまでも

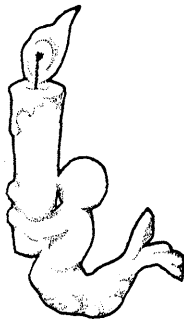
家の中でじっとはしてられない。学校に行っても
野球部のメンバーから、

「野球はいつから始まるの」

「今年、試合はどうなるの」

と、頻繁に聞かれるようになった。本来なら二月四
日から練習を始めているはずだった。早く野球がし
たい、という気持ちがひしひしと伝わってくる。地
震直後の被害の様子をテレビや新聞で見ているとと
ても野球のことなど口にする気にもなれないが、子
どもたちの気持ちを代表して伝えるべく部長宅に電
話をかけてみた。練習グラウンドである妙法寺小学
校は避難所となっていて、約百名の方がおられると
のこと。グラウンドは駐車場になっいて、学校自
体、体育の授業はできないし、朝会もグラウンドの
端の方でしている状態だという。妙法寺小学校の野
球部のメンバーの中には避難している人はいない
が、職場が被害を受けているという人は多くいるら

しかった。また、同じ西リーグの十三チームのう
ち、避難所暮らしをしていないのは妙法寺と花谷
チームだけで、残りの十一チームは、須磨区でも南
の方や長田区に位置し、被害がひどく、家が全壊し
ていたり焼失してしまった人もいて、大変なこと
になっているとのこと。公式試合によく利用してい
た須磨海浜グラウンドや遠矢浜グラウンドはガレキ置
き場となっているし、南駒栄グラウンドは避難所と
してテントが一面張られているし、空き地という空



き地には仮設住宅が建つ予定で、練習する場所がない。試合も今シーズンは開催の見込みは皆無。指導者も含め、皆、自分の生活が先決で、野球どころではないとのことだった。六年生にはかわいそうだがこればかりはしょうがない、という話だった。わかつてはいたものの、こうはつきり言われてしまうと絶望的だった。世間でも、高校野球の春の選抜大会をするかしないかが注目を集めていた。子どもたちは、もてあますエネルギーを自主トレという形で発散させようとしていた。

行つて、外野のノック練習や試合形式の練習をしただりしていた。バッティング練習は新聞紙をまるめて作ったボールで行った。しかし、この大きい公園はもともとサッカーの練習に使っていたため、同じ六年生のサッカー部員と場所の取り合いでトラブルとなり、野球部は身を引くことになった(後に、この大きい公園にも仮設住宅が建った)。

選抜高校野球の開催が決まり、諦めかけていた気持ちに少しの希望がもてるような気がした。ちょうどこの頃、花谷チームが、唯一学校のグラウンドが使えるということで、「震災に負けるな」と西リーグの全チームを招いて練習試合を計画してくれた。午前午後に分かれ、昼食時には豚汁とおにぎりを作ってくれていた。久しぶりにグラウンドで思いっきり野球ができて大満足だった。花谷チームのおかげがあって、この練習試合をきっかけに春季大会が始まることになった。思ってもみなかった試合の話

に興奮してくると共に、練習ができていないことに不安を隠しきれない子どもたちに代わって、部長に、学校での練習再開を懇願したが、七十名程の避難している人に迷惑がかかるといけない、ということではなかなか許可が出ない。何度か交渉し、範囲を狭くして車には当たらないように工夫するということで、少しずつ練習を始めた。

日がたつにつれ、避難している人の数も減り、夏休み中には避難所解消となり、やっと例年通りの練習ができるようになった。夏休み中には、「がんばれ神戸っ子復興支援親善交流少年野球大会」と称した過去にはなかった市外のチームとの交流試合も何回かすることができた。夏のオール神戸軟式少年野球大会、秋のリーグ戦と、振り返ってみれば、一時はどうなることかと思っていたが、ひと通りの試合も行うことができ、もうすぐ退団式を迎えようとしている。春の大会ができることになり、開会式で、

両リーグの会長の、「私の家はこの度の地震で、倒壊、全焼してしまいました。すっかり落ち込んでいましたが、子どもたちの元気に野球する姿にとても勇気づけられました」という言葉がとても印象的だった。大人はすぐに後ろを振り返り、昔はよかった、と今の自分から目をそむけがちである。しかし、子どもはちがう。被災の程度には差はあるにしても、皆元気で前向きだと思ふ。野球をしている姿は本当に楽しそうで満足感に満ちあふれている。

前代未聞の大震災から約九か月。いつまでも起こってしまったことに固執してはいられない。長男の野球を通して忙しく月日が流れ、次の試合、次の大会と、絶えず前を見つづけることが、原動力となっていることを感じる今日この頃である。

(神戸市在住)